

Forex

株式会社 ジャパン
エコノミックパルス
〒103-0007
東京都中央区日本橋浜町
2-33-5
Tel 03-5962-3910
Fax 03-5962-3913
www.j-pulse.co.jp
info@j-pulse.info

Market Insight

2023年11月6日（月）

ドル安とクロス円の円安、持続と反動焦点

FRB政策と米金利・株、米債入札、中国指標等ならむ

今週の為替相場は全般的なドル安とクロス円取引での円安・外貨高について、持続余地と反動調整をにらんだ展開となる。週間予想はドル/円が148.20-150.80円、ユーロ/円は158.80-161.80円。前週は米FRB・FOMCでの利上げ終盤示唆や米雇用減速、米債金利の低下などにより、全般ドル安が後押しされた。一方で米株高によるリスク選好や、対ドルでの非ドル通貨高を受けて、クロス円は円安と非ドル通貨高に振れている。今週はFRBの政策動向と米国の金利・株価、米債入札、中国指標などが焦点になる。

米金利低下も実質金利は上昇余地、ドル下支え

今週の為替相場で注目されるのは、米FRB幹部発言や米経済指標などを踏まえたFRBの政策動向と、米国債金利、米国株の行方となる。

前週の米FRBによるFOMCでは、利上げが見送られたほか、長期金利の急上昇に伴う金融引き締め効果と利上げ必要性低下への言及、インフレは抑制方向といった説明があった。続いて前週末の10月雇用統計は、雇用の減速と失業率の悪化上昇、賃金の伸び縮小となっている。

結果、米国債市場では10年債金利が大幅に低下した。政策金利FF（翌日物）の市場予測では、金利スワップ市場などで12月の追加利上げ観測が後退し、今年7月が最後となる形での利上げ終了や、来年5-6月にかけての利下げ時期前倒し、来年中の計1%の利下げなどが織り込まれつつある。為替相場ではドル/円を含めて、全般ドル安が後押しされている。

その中で今週はFRB幹部の発言機会が予定され、9日のパウエル議長による討論会参加などでの政策関連発言が注目されやすい。指標は9日の新規失業保険申請件数や、10日のミシガン大学消費者信頼感指数などが焦点となる。

改めてFRBの利上げ終了と来年利下げの確度が高まったり、指標で米国景気の減速が再確認されると、米債金利の低下とドル安の流れが後押しされる。ドル/円については長期スパンで、昨年10月と今年10-11月の151円超えで「2番天井形成」によるドル高のピークをつけたか否か、連動する形でドルの戻り売り圧力が強まっていくか、が注目される。

一方でFRB利上げ終了期待や米債金利の低下は、前週から米国株の反発材料となってきた。日本など世界的にも株価の支援材料となっており、リスク選好が為替相場のクロス円取引（ドル/円以外）で円安・外貨高の要因となっている。同時に全般的なドル安と裏表による対ドルでの非ドル通貨上昇は、クロス円で円安・非ドル通貨高を支援し始めた。

今週以降、リスク選好が維持できると、クロス円で円安・外貨高が持続。ドル/円ではドル安・円高が抑制されたり、小幅ながらも円が連れ安となる可能性も残されている（全般ドル安でも、対円ではドル小幅高）。

その他、クロス円で円安・外貨高を支援したり、ドル/円でのドル安抑制、もしくは小幅なドル高となる材料としては、1) 米債金利の低下に連動して日本の

WARNING! 記事並びに情報はすべて株式会社ジャパン
エコノミックパルスに帰属しています。無断転載及び転送
は法的に罰せられますのでご注意ください。



〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町2-33-5 マリオン浜町ビル
TEL (03) 5962-3910 FAX (03) 5962-3913
E-Mail info@j-pulse.co.jp URL http://www.j-pulse.co.jp
発行責任者：上坂 郁 編集長：原田 祥二

国債金利も低下となる、2) FRBの利上げ休止や来年利下げの可能性は、日銀による緩和修正の度合い抑制や出口遅延の要因となる、3) 米国で金利低下・株高が先走りし過ぎるとインフレを再上昇させるため、FRBが幹部発言等で「利下げは尚早」などと牽制する可能性がある、4) 10月の米雇用統計減速はストライキの影響があり、今後の指標は年末商戦などもあってリバウンド改善となる——といった要因が注視されそうだ。

さらにFRBは利上げ休止で様子見モードに移行しても、現状段階では来年4月頃まで「政策金利の現状維持と高止まり」が想定されている。その間に過去の利上げ効果などで米国の物価が下落していくと、「名目金利－インフレ率（期待インフレ率など）」で算出される実質金利は、「金利高止まり－インフレ低下」で上昇の余地がある。米国での実質金利の上昇余地は、ドル/円でのドル安余地の抑制や、調整ドル安を経ながらのドル高値圏でのレンジ安定化につながる可能性がある。その他の注目ポイントは以下の通り。

<週足、ドル/円は9週平均を巡る攻防>

為替相場の短中期トレンド判断で参考になるのが週足テクニカルだ。ドル/円は7月7日週からのドル上昇基調を経て、前週からはドルが反落となってきた。11月6日アジア市場時点の数値によると、「9週移動平均線を中央値としたボリンジャーバンド」では、9週線149.21円前後を巡る攻防となっている。

同ラインを上抜けしている限りは、基本的なドル高の基調が継続。9週線などが下値メドとなり、週間ベースでの上値メドとしてはバンド上限150.48円の方や、その上の方などが意識されていく。反対に完全に下抜けとなれば、当座のドル安基調入りが見込まれる。週間ベースでのドル下値メドとしては、バンド下限147.95円の方やその下の方向が視界に入る。

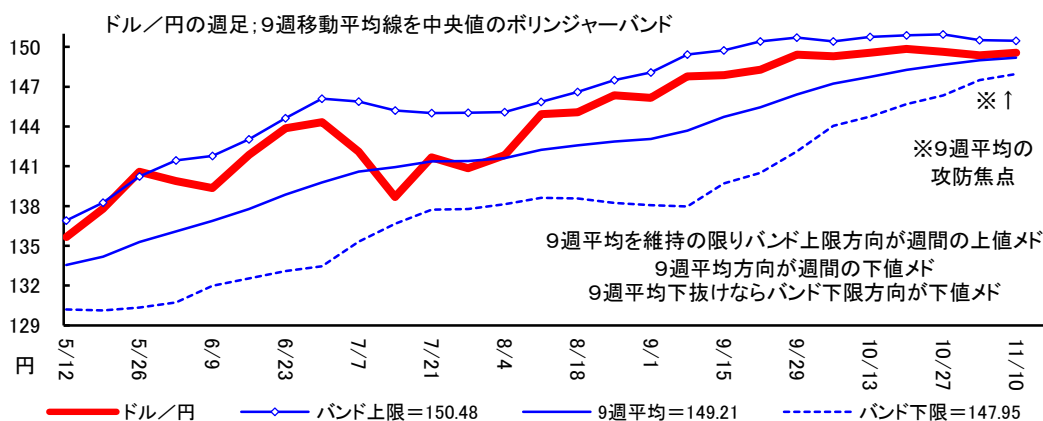
クロス円取引は8-10月にかけて外貨安・円高が優勢となってきたが、前週からは外貨が再上昇・円が再下落となっている。今週以降は外貨の反発基調が本格定着していくか、あるいは外貨が根強い戻り売りに押されていくかの見極めとなる。いずれのクロス円取引についても、「6週や7週の移動平均線などを上抜け定着できるか否か」が目先の方向性を左右していく。

<米国債の四半期定例・大型入札>

今週の米国債市場では、7-9日にかけて四半期定例の大型入札が予定されている。前週の発行額公表では事前に財政赤字拡大を受けた発行増が懸念されていたが、実際には規模が抑制され、米債価格上昇と米債金利の低下、ドル安が後押しされている（米債市場の需給悪化懸念一服）。

今週の入札では前週からのFRB利上げ終盤示唆や米雇用統計の減速もあり、応札需要の増加が注目されやすい。実際に良好な需要が示されると、米債価格上昇と米債金利低下、全般ドル安の要因となる。

一方で米国内外の投資家から米国債への需要と信認が確認された場合、ドルの下支えやドル安抑制の要因にもなり得る。さらに前週からは米国債への過度な懸

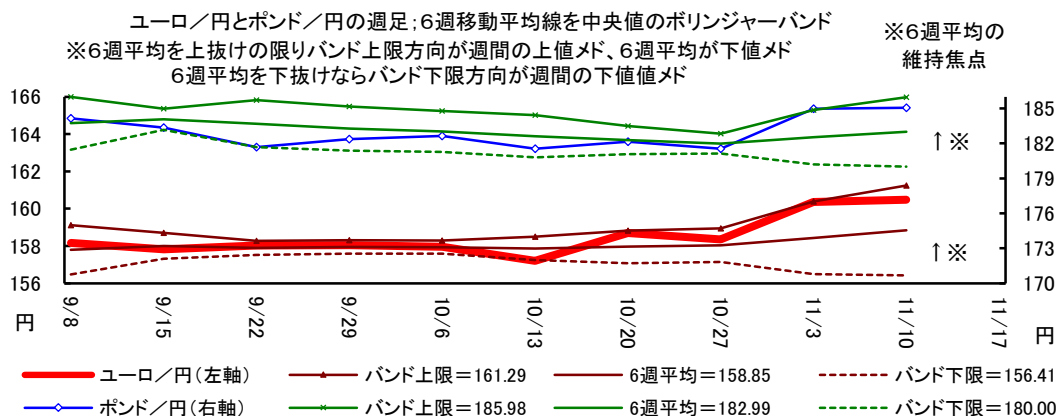


念が一服となっているだけに、少しでも需要が伸び悩むようなら、改めて米国の債務増加やインフレ高止まりといったリスクの残存を想起。米債金利の上昇とドル高に振れるという、波乱余地も残されている。

＜中国の経済指標＞

今週の中国市場では、7日に貿易統計、9日に物価指標などが予定されている。直近の中国指標は10月のPMIなどが伸び悩み、改めて景気の減速が懸念されている。今週以降の指標でも改めて需要の悪化やデフレ圧力（物価低迷）が示されると、中国人民元の下落のほか、中国の内需や資源需要の影響を受ける資源国通貨の下落に作用する（豪ドル、NZドル、カナダ・ドル、南アフリカ・ランド、メキシコ・ペソなど）。反対に安全逃避通貨であるドルや円は上昇となる。

一方で中国では10月以降、景気や不動産のテコ入れ策が強化され始めた。中国共産党の政策としても年間の成長目標を達成させるため、年前半の減速を年後半にカバーするような対応の強化と効果の表出は無視できない。中国指標が懸念ほど悪化しない場合、資源国通貨高と全般的なドル安、クロス円での円安につながる余地も残されている。



お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。本レポートの内容は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。